

ご挨拶

「信陽舎の運営理念 ～人格を培うための場～」

公益財団法人信陽舎 理事長 福与卓臣

長野県人学生寮・信陽舎の運営理念と言え、寮の食堂に掲げられている加納金三郎第2代理事長の筆になる広瀬淡窓の詩の一節「君は川流を汲め、我は薪を拾わん」と、宇佐美珍彦第3代理事長が寄宿舎生活を詠んだ一節、「友の憂いに吾は泣き、吾が喜びに友は舞う」との言葉に凝縮されているのではないかと考えます。

私の70余年の人生を振り返ってみたとき つくづく思うことは、信陽舎で過ごした3年間の寮生活の貴重な経験が、その後社会人になってからの人生に大きな財産となったということです。

”人間として世の中に生きる”とはどういうことかを考えるとき、いつも頭に浮かんでくるのは司馬遼太郎の次の言葉です。『”人”という字をよく見ると、ななめの画がたがいに支え合って構成されていていつも感動させられます。人間は決して孤立して生きられるようにはつくられていない』。つまり、人間とは、他のひとびとと互いに関わり合い支え合っただけでしか生きられない生物だということです。別の言い方をすれば、人間とは、”関係としての存在”、人や社会や自然などと関わり合い支え合っただけでしか存在し得ない生き物だということです。

よく”社会は人なり”とか”組織は人なり”と言われますが、”社会とは支え合う仕組み”なのであります。したがって、社会的存在としての人間を育てるという意味で大事なものは、”関係の在り方”を学ばせることだと思います。

それには、共同生活、集団生活がとても有効です。同じ釜の飯を食べ、寝起きを共にし、協同で作業をする。

そのことで自然と人間関係の在り方が学べ、人格が培われるわけです。

昔、江戸時代後期から明治後半頃まで西日本各地に”若者宿”とか”若衆宿”と呼ばれるものが存在したんですが、特に有名なのが幕末の薩摩藩における「郷中宿」という薩摩独自の教育機関ですね。若かりし日の西郷吉之助(隆盛)を郷中頭として、大久保利通、大山巖、西郷従道、東郷平八郎などがそこで育った。

また、幕末に長州藩の萩で吉田松陰が営んだ「松下村塾」からは、高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤博文、井上馨、品川弥次郎など、多くの明治維新の立役者を輩出した。さらに、同時期の大坂には蘭医の緒方洪庵が運営する「適塾」があり、そこでは30名の若い塾生たちが30畳の部屋で共同生活をしながら蘭学を学んでいた。その中から大村益次郎、橋本左内、福沢諭吉、長与専斎、大鳥圭介、箕作秋坪といった維新後の近代日本の基礎を築くことになる多くの人材が育ったんですね。

これらに共通しているのは、若者達が集団生活、協同生活を通して学ぶという、まさに理想的な社会教育システムだったということです。

協同生活では、自分のことだけ、自分の利害や都合ばかり考えていたらうまくいきません。お互い支え合いながら生活するわけですから、皆のためにと他者を意識して、すなわち皆の利害や都合を考慮して行動しなければならぬため、自然と「どう行動したら皆から信頼され感謝されるだろうか？」という人間関係の在り方(=社会性)が学べ、身につけていくわけです。

そのような役割は、昔なら若者宿とか塾、あるいは寄宿舎などが担っていたわけですが、今日では信陽舎のような学生寮こそが、その役割、つまり”社会性=人間関係の在り方”を学ぶ場としての役割を担うべきだと考えます。

信陽舎は武蔵野市の高齢者福祉施設(桜堤ケアハウス)と合築した全国でも珍しい学生寮で、4階建ての建物は「春秋館」と名付けられ、学生(寮生)と高齢者の交流が行われ注目されています。

少子高齢化と多様性が急速に進むと予測されるこれからの社会においては、高齢者と若者、健常者と弱者の共生が課題となってきます。その意味において、寮生と高齢者が共生する信陽舎は時代を先取りした”モデルケース”とも言え、まさに人格を培う場としての信陽舎の存在価値は大きいと自負いたしております。

信陽舎の運営に当たっては、寮生たちが明るい未来のための糧(財産)となるような充実した寮生活を送ってもらえるよう、一人一人に寄り添い、その成長していく姿を見守りながら運営していきたいと思っています。寮生の成長する姿を眺められるのが私の無上の喜びです。

信陽舎に学び、社会に羽ばたいて行く寮生たちに、座右の銘としてシャトーブリアンの次の言葉を贈りたい。

「人間が自分ひとりで生きて行けるなどとは何と申し上げた若者よ、力を授かった者は、それを隣人のために使わなくてはならぬ！」